

# ニコリのたね



## ● 作者からのメッセージ

みうらもとお

この作品は、自分が子どもの頃のことを思い出しながら書いた。子どもの頃カズちゃんという子によく遊んでもらった。当時、私の近所では学年に関係なく、下は幼稚園児から上は六年生まで一緒に集団でわいわい遊んでいた。カズちゃんというのは私より四つ、五つ年上の男の子で集団の中でもリーダー格の一人だった。ちゃんばらごっこや鬼ごっこも楽しかったが、カズちゃんたちが考え出す遊びも面白かった。建具屋さんからリヤカーを持ち出してきてスポーツカーごっこ。三、四年生たちが引っ張る。乗り込むのはもちろんカズちゃんたちリーダーグループだが、私たち何人かいた一年生も乗せてもらえた。カズちゃんが叫ぶ「出発〜っ…右〜っ…左〜っ……」必死に引っ張る三、四年生たち「ブレーキっ」さあ、私たち一年生の出番だ。私たちはリヤカーの荷台の鉄枠に荒縄で結んであった大きな石を荷台から落とす。石はずるずると引っ張られ、もくもくと土煙があがり、やがてリヤカーが止まる。荒縄で結んだその石はスポーツカーのブレーキだったというわけだ。そう、カズちゃんたちは私たち一年生にもちゃんと役割を作ってくれていたのだ。他にもカズちゃんたちはいろんな遊びを考えだし遊んでくれた。そのカズちゃんは、私たち一年生や幼稚園児たちが遊んでもらおうと「カズちゃ〜んっ」と探していると、「わっはっはっはっ…」といきなり塀の上にあられて私たちを驚かせてくれた。家から持ち出したサングラスをかけ、背中には風呂敷がなびいていた。そう、この作品の中で山田親娘を大冒険に連れ出す『ゴッコマン』こそ、我が懐かしの遊びの天才カズちゃんなのです。因にゴッコマンのゴッコはゴッコ遊びのゴッコです。何万円もするゲーム機や何千円もするソフトがなくてもいくらだって遊べる。遊びに必要なのは道具でもお金でもなく友達なんだ。遊びにマニュアルは無い。友達同士で知恵を出し合えば遊びは作り出すことができる。大切なのは“想像力と創造力”なんだから。……

### 作者略歴

1985年に小劇団海賊船カンパニーを旗揚げ『星降る街にCRY・CRY・CRY』  
『スクランブル 7月のアスリート』『ヘビィ・ジョーク 泣き虫オデッセイ』等々  
1990年代「演劇祭荒らし」と呼ばれるほど多くの演劇祭に次々にエントリーされ  
活躍。注目を集める。2000年を前に劇団は解散したが、今だ復活を望む声は多い。  
『ニコリのたね』『未確認ともだち物体』厚生省中央児童福祉審議会推薦文化財受賞

